

Childhood Education

Journal of the Association for
Childhood Education International

一月号

巻頭の論文で教育行政官のフランシス、ケッセル氏は「法律と人間の心情」と題して米国の法律と米国の教育は実に多くの共通点をもっている」と述べている。どちらもアメリカの基本的な伝統と価値感を保持し、しかも同時に複雑でダイナミックな現代社会の要求に答えようとしている。どちらも基本的人権の

保障をうたった憲法と「権利章典」からインスピレーションと力を引き出している。

この巻頭言ではさらに民主的な原理を生活に浸透させるために法律の力を借りなければならぬと述べている。しかし、その法律も教育との提携によってはじめてできることである。

そこで国の中の指導者として教師の進出が望まれるのである。さらにこの富める国のなやみとして、経済的にも文化的にも非常に困窮している家庭の子女の問題がとりあげられている。

結びとして、学校は学校という機構の中だけにとどまっているのではなく、社会の諸機関や地域社会の種々なグループ、労働や商業、市政などの指導者たちと共に連関を緊密にもって、はじめて米国の開拓者の夢すなわち自由と平等の世界をもたらせることができる」と述べている。

現代において児童というものは人類社会にとって得難い大切なものとされていることは今更いまでもないことである。しかし産業革命以来、未成年者を不法私用から保護する

ために種々の法律が出された後も、子どもは大人を小さくした者で体罰を加えたり、厳しくしつけるべきであるという考えが通用していた。

ニューヨークの公立学校元教師のルイス・アン・セベズ氏は「児童の権利」と題して一九〇九年から半世紀にわたる今日にいたるまでのホワイト・ハウス・カンファレンスや国際連盟、国際連合より宣言された児童の権利に関するものについてとりあげている。

一九〇九年第一回ホワイト・ハウス会議が、セアドル・ルーズヴェルト大統領によって召集され、この会議の結果として児童局ができた。

一九一九年、第二回ホワイト・ハウス会議がワイルソン大統領によって召集され、児童福祉の問題が論議され、児童衛生や児童擁護のための基準がきめられた。

一九二四年の国際連盟ジュネーヴ宣言ではすべての児童の福祉を対象としてなされた最初の国際的な会議が開催された。人類は児童に対して、物心両面に渡って最善のものを与えなければならぬと記録されている。

一九三〇年のホワイト・ハウス会議では三千人の代表者を擁し、従来の異常児の問題から普通児、あるいは一般の全児童に対して問題の中心点が移され「児童のために何がなされ今後何をどのように実施すべきか」に関するスケールの大きい調査を行なうこととなった。

この会議で推薦された事項は後に制定された米国の児童憲章の内容に記されている。

一九五〇年の会議では政府と民間の諸機関の提携、人種差別の撤回などの必要が叫ばれた。

特筆すべきことは一九五九年の国際連合の総会で行われた児童の権利に関する宣言である。これは十項目にわたって、児童が身体的、知的、道徳的、精神的、社会的各方面にわたって健全に発達する権利のあることを示している。この宣言によって、児童は児童に特有の要求と権利のあるものとして広く世に認められたのである。

一九六〇年のホワイト・ハウス会議では、前述の国際連合で行われた児童の権利に関する宣言を全面的に支持することが決定され

た。一九七〇年には「世界の子ども」というテーマが案として提出され、すでに海外からも多数のオブザーバー参加の要望が高く、今や、子どもの権利を守り、これを高めていこうとする関心と気運は米国だけにとどまらず、世界的にも拡がりつつあるものである。

他の記事として「虐待された子ども」や犯罪や盗みをする子どもについての記事がある。いずれもこれらの子どもたちはこのようになる理由があったもので、その原因を探るためにはどのような対策があるか、どのように更生させ、指導できるかについて述べられている。

すなわち、学校当局が単に子どもの担任教師に責任を負わせるような狭いとり扱いをせず、広く心理学者、精神分析者、児童福祉機関、警察、少手審判院、などとフランクな話し合いをなし、相互に思想と資料の交換や提携が必要であると力説している。

また、待遇問題や早教育などについて果てしない難問題があるのは日本だけかと思つたらイースターン・ミシガン大学の教育学者、ロバート・フィッシュャー氏がこれらの問題に

ついてとりあげている。

氏は現代はすべてアカデミックなことを優位におき、子どもたちのために楽しい生活の場であるはずの幼稚園までもこの文明病に犯されるようとしていると警告をしている。

そしてあるヴェテランの視学官がある教師大会で述べた言葉を紹介している。この視学官は学校行政に関して困難な問題が山積してどうにもやりきれなくなった日はなるべく次の朝どこかの幼稚園に行つて時間を過ごすことにしている。子どもたちの活気、自発性、新鮮なユーモア、そうしたものに触れると又新しい気持ちになつて精力を回復することができるといふことである。

幼稚園という所は比較的他の高学年ほど知的教育の圧力がかかかっていない。教師の配慮によつて適当に仕事や遊びをする時間がある。食べたり、休んだり、歌い、踊り、子ども同士で互いに計画したり、試してみたり、好奇心や発見の喜びを見出したり、いろいろなことを通して互いに交流し合い、又新しい目標を見出したりすることができる。つまり幼稚園とは先生も子どもも堂々と一緒に楽し

み、生活し、遊びながら学ぶことのできるところである。

しかし、この自由な空気を嫌う教師もある。こういう人たちは学習はかならず抑圧を伴わなければ成立しないように思っている。そして幼稚園で大事なことは子どもをしずめることであると考えている。又ある先生はワーク・ブックなどに早々と取り組ませ、これがアカデミックな将来の基礎になるものであると考えている。

米国でも早教育の可能性がやかましくとりあげられ、実際に入園以前から読み書きのできる子どもたちもいるそうである。しかし教育に関して「なぜ急ぐのか」という根本的な問いを発しながら早期教育のマイナスを説くヴェテラン教師もまだいることは心強いと筆者は述べている。

問題は幼稚園の先生たちは子どもたちが不当の圧力を受けることに関して憤りを感じているが、早教育の記事をどんどん売り出している流行雑誌社や、これに飛びつく親たちなどに對して、どのようににたちうちできるか、全く見当がつかないで失望しているというこ

とである。幼稚園の教師たちが集まるとお互いに二部教授のことや狭い保育室にあふれる定員過剰の園児数や中央局の最近の通達に関する不平等と話の内容はきままっている。

F氏はこの稿で、問題をかかえた幼児教育者たち、児童学者専攻の学者や研究者たち、広く子ども一般のために何かの力をもって尽くしたい幾人かの親たちなどによって新しいグループをつくり、子どもを子どもらしい生活に戻すように運動してはどうかとすすめている。

二 月 号

この号は「学習」についての特集号である。

巻頭文はマサチューセッツの教育コンサルタント、キャサリン・テラー氏によるものである。氏ははじめて木とはどういうものであるかが彼なりにわかったある七歳児と、二年の研究の結果一つの病原菌を発見する大切な糸口をつかんだある科学者の例をひいて、この重大さはともかく、この両者とも、人生における純粋な探究にうちこんでいると指

摘している。

真の学習者というものは意識的であろうが、無意識的であろうが、人生の一部分となるところの「意味」を探し求めている者のことを言う。このような意味は次第に彼の身近や世界のことがらについての知識を深め、広げていく。以前は不明瞭であった事柄がある洞察のひらめきによって急に意味をもってくる。そしてさまざまな経験を通してものの質と言うこと、美や秩序について関心がもたれるようになる。

学習はいくつかの意味のある経験より成り、又それらを反省したり理解したりできる能力によって成立しているものであると言える。成熟が増してくるとともに自己のもっている知識が意味をもち、それによって次のステップが展開し、さらに又自分で進む方向がわかってくるといったようなものである。学習はそれ自身において喜ばしい報いである。このような意味のある学習をさせるなら第二義的な報酬は全然価値のないことになる。

この稿では教師が一方的に子どもに教え込むことについてくり返し戒めている。そして

本来の意味での学習をさせるのは事柄の事実
に直面させて現実の問題にぶつからせ、自分
で解決を発見させることが子どもの学習をき
らに成長させるものであると述べている。

又すべて学習にとって大切な要素は大人と
子どもとの間のコミュニケーションにあると
記している。大人は子どもと交流する際に具
体的に何をどう気をつければよいか。

まず第一にすぐ判断を下さないで子どもの
言うことに耳を傾けることができるように。

又子どもとともに新しい発見に対して純粹に
喜べる人であるように。これは大人自身がた
えず新しく学びとっている人であればできる
ことである。又人間生活における秩序や価値
感などについて説教的、教訓的指示によらな
い表わし方をすること。そして喜びやたのし
きなどが純粹にわかちあわれること。このよ
うな角度からとりあげられると学習は人生を
通してたえず継続するものである。

「幼稚園は大切である！」フロリダ大学の
附属幼稚園のスウェット氏の指導により、同
氏が担任している子どもたちが幼稚園を終わ
るに当って両親たちにあてて幼稚園とはどう

いう所かという評価のレポートを出した。

ことのきっかけは朝の話し合いの時に「……
幼稚園なんか大事でないって言った人もいる
よ」という発言から、いや、幼稚園は大切で
ある。何故ならば……となってこのレポート
ができあがった。

「幼稚園は大事だよ。だって片づけること
がうまくなるから。自分がつくったものを片
づけるだけじゃないんだ。皆で片づけあいつ
こをするからとっても早いもの」

「委員会がいくつもあっていろんなことし
たわ。クリスマススの相談して、ママやパパた
ちをおよびびしたの。クリスマス・ケーキもフ
ルートツボンチもつくつたし、飾りつけだって
しておもしろかったわ」

「数をかぞえるゲームもしたし、ルールを
守ることもおぼえた」

「幼稚園にこなかったらきつとつまらなく
て一日中テレビをみて、外へも出ないから、き
れいなお天気だってわからないよ、きつと」
等々、生活発表とも反省、評価ともつかない
子どもたちのいきいきした幼稚園支持論が
記されている。

この子どもたちはあらゆる領域に着眼して
いるが、よい幼稚園のカリキュラムとは大学
のカリキュラムほど巾広いものであり、文
学、社会学、科学、美学すべてを網羅してい
るものである。

この子どもたちは幼稚園生活において学習
することのおもしろさと重要さを知った。こ
うした基礎の上に立ってこそ安定した気持ち
をもって小学校へ進んでいくことができるの
である。

* * *

三 月 号

「世界と教室を結ぶ」という題目による特
集号である。

巻頭の論文は「なぜ関心をもつか」コロ
ンビア大学のベークン教授執筆によるものであ
る。同教授は地学教育専攻であるだけに地理
的文盲と言う言葉を引用して我々西洋文化を
持つ者たちは世界の他の国々の姿を正しく捉
えていないのではないかと反省を促してい
る。我々は西洋文化がこの世界の中心である
かのように錯覚を起こしているが、実は世界

の人間のうち七五パーセントが西洋以外の文化をもつて生存しているのである。地理的

の学を除外するには単に社会科あるいは地理の学習でプリントした地図に地名の書き込みをさせたり「かわっている」「奇妙な」国の風習をおもしろくはなしたりするだけでは足りない。

又皮膚の色も宗教も言葉も、生活様式や価値感の全く異った人びとを黙認し寛大に扱うというだけでは足りない。根本的には人間と資源および地球上におけるそれらの配分についての大きい関心がよびさまされなければならない。地理学には一つの重要な課題がある。

すなわち、なぜ、そしてどのようにして、あるか所が他の所と類似したり相違したりするか、この答を得るためには地球上の資源に関する配分や人間と人間の働きなどについて克明な分析が必要である。

氏は人類の地球上における生活には千差万別の型があるが、これらに「善い」「悪い」はない。このような型も人間それぞれの基本的要求から出たものであり、これらの底には驚くばかりの共通点がある。子どもたちにこの共通点と相違点を理解させ、彼らがその真

価を認知するようにならなければならないと説いている。

「他人の自我——世界中の人びと——を受入れて」と題するニューヨーク州立大学のケンワシー氏の講演の概要が出ている。これは一九六四年A.C.E.I.の研究大会でなされたものである。この中でケ氏はわれわれの世界の隣人とは誰か？ 世界の人口の大半はアジアに住んでいる。非白人種で百姓や漁業に従事している人が多いが昨今都会へ流れ込む傾向がつよいと述べている。

同氏は世界の人びとのことについて学ぶ理由として経済的、政治的、に相互関連をもっていること、他国人の目からみた本国、又国外から自分の国を見る時に深く教えられること、他の国の人々の思想を知り、交流すること、人生を豊かに楽しくすることなどをあげている。又個人個人が安定感を持ち、人間の価値に対して基本的な信頼感をもち、相手国に関する知識を求め、共通の経験を味わうようにと述べている。こうした配慮は幼児期から行なわれなければならないと強調している。

(K)

幼児の教育 第六十四巻 第十一号

十一月号 © 定価六〇円

昭和四十年十月二十五日 印刷

昭和四十年十一月一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。